
Frigidus Symmetria (冷たい対称性)

Prini

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F r i g i d u s S y m m e t r i a (冷たい対称性)

【Nコード】

N 7 7 7 9 S

【作者名】

P r i n n i

【あらすじ】

地震によつて、深海探査船が制御不能に陥つた。船に乗っていた二人は、生存の解法を探し始めるが…… その解は、冷たいものだった。『冷たい方程式』のモチーフです。形式はニュートンの『プリンキピア』を模倣しています。

P r a e f a c t i o (序文)

好きだった”自然”が大切な存在を奪った。

A x i o m a t a S i v e L e g e s M o t u s (公理あるいは運動の法則)

L e x ?

C o r p u s o m n e p e r s e v e r a r e i n s t a
t u s u o q u i e s c e n d i v e l m o v e n d i
u n i f o r m i t e r i n
d i r e c t u m , n i s i q u a t e n u s a v i r i
b u s i m p r e s s i s c o g i t u r s t a t u m i
l l u m m u t a r e .

L e x ?

M u t a t i o n e m m o t u s p r o p o r t i o n a l e
m e s s e v i m o t r i c i i m p r e s s a , & a
m p ; f i e r i s e c u n d u m
l i n e a m r e c t a m q u a v i s i l l a i m p
r i m i t u r .

L e x ?

A c t i o n i c o n t r a r i a m s e m p e r & a m p ;
a q u a l e m e s s e r e a c t i o n e m : s i v e
c o r p o r u m i n d u o r u m
a c t i o n e s i n s e m u t u o s e m p e r
s e a q u a l e s & a m p ; i n p a r t e s c o n
t r a r i a s d i r i g g i .

『Principles of Mathematics』 (5th Edition) (問題)

P r a e f a c t i o (序文) (後書き)

この作品が、全ての”自然”災害に苦しんでいる存在に何かを与えられたら幸いです。

できれば、防災や科学に関心を抱いてくれる事を願います。

Definitio ? : Analogia (アナロジー)

二人はチェス盤を見つめていた。少しして、アクアが駒を進めた。コルプスの方は、即座にいい手が思いつかず、窓から外の景色を眺めた。

窓から見えるのは、ほとんど水だ。そして、見えない部分も水で囲まれている。二人がいるのは、海中にある潜水艇アクテイオの内部。アクテイオの目的は深海調査だ。そして、二人の仕事は海における様々なデータを集める事だった。二人は自ら望んで、この調査に乗り出したのだが、水に囲まれた変わらない光景と単純作業の繰り返しとなるデータ収集に飽きていた。

その暇つぶしの一つが、チェス。賭けたのは面倒な解析作業だ。

コルプスが、窓の近くにある水深計を見た。水深計は、この船が徐々に沈んでいる事を示していた。

「この船にも凄い水圧がかかっているんだよなあ」
アクアはそれに答える。

「正確に言えば、大気圧もかかっていますけど。」
コルプスは、盤面に向き直り、駒を進めた。それは、アクアの予想外の手だった。コルプスは大方論理的でありながら、時々、こういう意味不明な手を打ってくる。後で本人に聞いても、直感、気分といった非論理的な理由が78.3%を占める。(アクアによる統計調査より)

この潜水艇におけるアクアの勝敗は、一勝六敗。惨敗だ。無論、アクアが面倒な作業をしていた。ただ、コルプスは雑なので、細かい作業はアクアの方が向いていた。だから、チェスの勝負が無くて、アクアがおそらくやる事になっただろう。だとしたら、何故、チェスをやる必要があるのか？ アクアにとっては暇つぶしというよりも、チェスでコルプスより強くなるのが目的だったからだ。そもそも、アクアにチェスを教えたのはコルプスだった。他にも

様々な事を教わった。かなり分野が数理科学に偏ってはいたが。

「コルプスは自分が取った駒を見ながら言った。」

「そういえば、ファイマンが言ってたね。自然法則を学ぶ事は、神々のチェスを横目で見て、ルールを習得するみたいだつて。」

「アクアは、冷静に相手を追いつめる手を打つ。今まで、コルプスの予期不能な手に動揺して、何度負けた事だろう。」

「チェスは、ゲーム理論では、二人零和有限確定完全情報ゲームに分類されますね。よく、法則のアナロジーにゲームは使われますね。」

「アクアとコルプスは更に、数十手を打ち合った。互いの駒はほぼ取られ、ゲームは終盤へと近づいていた。ついにアクアが勝利を確信して駒を動かし、チェックメイトを宣言した。」

その瞬間に船内が大きく揺れた。

盤上の全ての駒が滑り、チェスのルールに代わって、重力の法則で落下した。アクアとコルプスも椅子ごと倒れ、駒と同じ法則で、ほとんど同時に着地した。空気抵抗は大きな影響を与えなかった。

Definitio ? : Aequatio (方程式)

突如として大地震が起こり、潜水艇は岩に叩きつけられたのだった。コルプスは、アクテイオの状態を確かめた。スクリューがちぎれたが、船体は大丈夫な様だ。また、空気の循環装置も正常に動作していた。窒息の危険は当分の間、無いだろう。すぐに、ソナーで救援を求めた。

「こちら、第三深海調査隊。潜水艇が制御不能に陥った。救援を頼む」

超音波は水中を同心円状に広がり、調査本部に届いた。

アクテイオはゆっくりと沈み続けていた。コルプスは緊急浮上するため、バラスト投下ボタンを押した。これで、浮上するはずだ。そう思い、コルプスは窓から外を見た。一面、水だらけで下に向かっていているのか上に向かっていているのか、分からなかった。ふと、アイシユタインの等価原理がコルプスの頭に浮かんだ。仕方なく、水深計を見ると、依然として沈み続けていた。投下装置の故障で、一部のバラストは投下されなかったらしい。

「アクア。装置が故障したようで、バラストが投下できないんだ。故障箇所を一緒に探そう」

アクアが故障原因を探そうと、コルプスの元へ来たときにソナーが鳴った。全てが水に囲まれた世界では、電磁波は減衰して通信には使えない。水の振動によるソナーだけが唯一の通信手段だった。水中の音速は空気中の四倍近くとはいえ、光速には到底及ばず、届くのには時間がかかりタイムラグがある。

「こちら、救助隊。現在、大地震が発生して、直ちに救助には向かえない。早くても、7時間はかかる。すまない」

アクアはその返答を聞き、今の潜水艇の深度、加速度、耐圧限界を調べ、計算をした。

現在地における海底の深さは、潜水限界より深かった。更に、推進

装置が故障した為、浅瀬に移動する事はできない。つまり運動は二次元とみなせて、沈むか浮くしかできなかった。

潜水艇に働く力は大雑把に考えると、浮力、重力、抵抗力だ。運動方程式は次の様になる。古典的だ。

$$m \frac{dv}{dt} = Vg - mg - kv$$

浮力が重力を上回れば、無事に浮上する事ができる。そうでなくても、浮力と重力が釣り合えば、抵抗力によって潜水艇はある深度で停止する。無論、それまでに耐圧限界を超えてしまえば意味は無いが。

このまま、バラストが投下できない場合、約3時間後には、耐圧限界を越え、潰れてしまう。救助隊が来る7時間には、到底及ばなかった。

「コルプス。大変だ！ このままなら後3時間ほどで潰れる」
コルプスは、素早くアクアの計算を確かめ、うなずいた。

「本当だ！ とりあえず、投下装置を直してみよう。もしダメなら、他の手段も考えないと」

アクアとコルプスはバラスト投下装置を直そうとしたが、その原因は船の外部にあり、内部からの修復は不可能だった。船外に出たところで、水圧によって潰されるだけだ。

二人は、他の方法を模索し始めた。浮力を強める何らかの手段は考えつかなかった。それどころか、フロートの一部が破損して、浮力が小さくなっていた。つまり、浮力は一定だ。そうなると、取りうる手段はただ一つ、質量mを小さくする事だ。この潜水艇には二つの船室が有り、その形状はほとんど同じで、左右対称になっている。間には隔壁があり、緊急時には片方の船室を水中に切り離す事ができた。片方の船室に不要物を集め、共に破棄する計画だ。

二人は、沈まないために、どれだけの質量を捨てる必要があるか算出した。そして、船内にある不必要な物を片端から集め、その質

量を測定した。しかし、浮かぶための質量には少し足りなかった。

「コルプス。もう捨てるものが無い。救助隊が予定より早く来る可能性に賭けるしか・・・だから、早く船室を切り離そう」

コルプスは何か思案しているらしく少し返答が遅れた。

「そうだな。今、思ったんだけど、あの記録装置はずいぶん旧型で重そうだ。中のデータをもっと軽い記録媒体に移動すれば、予定の質量に足りる気がする」

アクアはコルプスの指差した先にある旧型の記録装置に目を向け、言った。

「確かに。やってみよう」

「じゃあ、アクアにデータの移動は任せた。私はその間に、もう一度、船内に不要物が無いか調べて、何時でも船室を切り離せるよう準備しておく」

「分かった」

アクアは早速データの移動準備を、コルプスは船内を搜索し始めた。データの八割が移動した所で、コルプスが準備を終えたらしくアクアの元に向かった。

「アクア。データは後何分で移動できる？」

「多分。5、6分くらい。あと少しだ」

「じゃあ、その間にこれを移動しておく。ケーブルが長いからそのまま大丈夫なはずだ」

「ケーブルが抜けないように注意して！」

コルプスは記録装置を廃棄する船室に移した。ケーブルがアクアのもとまで延びていた。少して、データの移動が完了した。

「コルプス。データの移動が終わったよ！」

アクアが振り向くと、なぜかコルプスはまだ、反対の船室にいた。

「そうか。じゃあ、さようなら」

当前の事のようにコルプスはケーブルを切断し、壁面にあるスイッチを押しした。隔壁が下がってきた。アクアは嫌な予感がして、叫んだ。

「何してるんだ！」

アクアは、急いでコルプスの元に向かい、隔壁を止めるスイッチを押した。けれども、隔壁は止まらず、下に落ち続ける。コルプスが冷静に言った。

「そちら側からは操作できない」

アクアは、コルプスのほうを向いた。隔壁が半分近く下がってきていた。相変わらず、コルプスは向こう側の船室にいる。

「早くこっちに！ 出れなくなる！」

けれども、コルプスは一向に動かない。まるで、壁を境にポテンシャルが無限大になったように。

「そちらには行けない。アクア。この記録装置は確かに重い、それでもまだ、質量が足りないんだ。そして、残りは私の質量で足りる。だから私ごと放り出すんだ」

それは無意識のうちに避けていた、この微分方程式における最悪の解法だった。

「だったら、私が死ぬ。コルプスが生きて」

「ダメだ。それは感情を抜きにしても、無理なんだ。私の方が体重が重い」

「こんな所で別れるなんて。まだ話したい事と一緒に研究したい事が山ほどあったのに……」

その間にも隔壁は一定の速度で下がり続け、屈まなければ互いの顔が見えなくなっていた。

アクアは周りを見渡しながら、熟考した。ニュートンの古典力学は崩壊した。ラプラスの悪魔を退けた。にもかかわらず、この状況は変えられない。変わらない。屈するしかないのだ。自分が生きたいのなら。所詮は自分が。自分が。自分が……

「片方が外に出なければ、両方とも死ぬんだ。だから、君が生きる。これがこの方程式の唯一解だ。アクア。私が死ぬ事を君が責任に思

う必要は無い。今まで通りに生きてくれ」

コルプスが死んだ前と後では、世界が異なるだろう。連続ではなく、不連続になる。断絶的だ。今まで通りに生きれるはずが無い。けれども、その願いはよく分かった。

「分かったよ。コルプス。せっかく、チェスで勝ったのに、もう戦わずに逃げるのは卑怯だ。私の勝率が50%を超えるには最低、後83回も勝つ必要があるのに」

「そうだ。私は卑怯者だ。アクアがチェスの世界王者になって、チェスマシン Deep Blue 6500を負かしても、私を超えられない。」

最後に見たコルプスは、涙の軌跡が描かれた笑顔だった。

隔壁は完全に閉じた。一つだった空間は二つに区切られた。生と死の空間に。バラストという死んだ物質の代わりに生きた^{コル}corp^{us}usが沈んだ。質量としては等価だが、それ以外は等しくなかった。コルプスが入った箱は切り離された。その反作用で少し船体が揺れた。コルプスは沈む、深海へ。その反作用でアクアは地上へ。

量子力学では、観測していない時、事象は決定していない。コルプスが質量だけ置いていき、壁をトンネル効果で突き抜けてこちらにくれば。私は目を閉じた。そうすれば、コルプスは半死半生のはずだ。しばらくは何も起こらなかった。待った。よく考える。観測するという行為は、光だけではない。音も重要な観測要素だ。耳も塞がなくてはならない。私は耳も塞いだ。

私の生はコルプスの死によるもので、私の死は、コルプスの生によるものだ。つまり、私の生はコルプスの反作用。EPRパラドックスが生じる。そうだ。観測しなくても、事象は既に決定している。コルプスは重力によって沈み押しつぶされ、私が入った箱は、アルキメデスの原理で浮上する。その浮力の源は何か？ 万有引力。コルプスを潰す水圧の源は何か？ 万有引力。万有引力は全てを引き

寄せる。希望も絶望も。

Lex ? : Inertia (慣性)

救助隊が来て、私は助かった。コルプスを殺したのだから、罰を受けるだろう。しかし、誰も私を責めなかった。皆、同じ事を言う。

「君だけでも助かってよかった。あれは事故だから、君が責任を負う必要はない。」

彼らが、善意で言っている事、他に掛けるべき言葉があまり無い事は分かっている。それでもその言葉は聴きたくなかった。

事故だ。しょうがない事だ。この様な状況をカルネアデスの船板というのだ。私の理性は、それが正しいと命じる。だが、心は間違いだと呼ぶ。過去は変えられない。本当に私に責任が無かったのか？ 原因を調べなくては、到底納得できはしない。真実を求めよう。

それから私は、調査を始めた。まず、潜水艇の設計図を手に入れ、引き上げられた船体の片方を徹底的に調べ、ネジの一本まで、記録した。次に潜水艇故障の原因である、謎の地震についても、情報を入手した。そして、あまり褒められたことではないが、救助隊に不手際が無かったかも調べた。

兎に角、この事故？（事故ではない可能性があるからこそ、私は調査しているので、この名称は暫定的である。）に関係あるデータを片端から集めると、両方が救えた可能性を模索し始めた。可能性があったところで、時間旅行はできないというのに。

地震の原因は、専門家の間でも不明だった。また、この地震で、自分よりもはるかに悲惨な目にあつた者も大勢いたので、止む無くこれは第一原因と仮定せざるを得なかった。救助隊は、この地震でかなり忙しく、私を助けに来れるかさえ疑わしかったのだ。しかしよく考慮すると、ある程度の時間短縮は可能であった。だが、これが原因だとしても、救助隊を責めることは辞めていた。

この時間も考慮して、私は精密なシミュレーションを作り上げ、

考えられる全ての可能性を実行した。例え、ラプラスの悪魔が存在したとしても、その可能性は莫大なものとなる。0と1の組み合わせが八つ重なるだけで、千以上の可能性があるのだ。バタフライ効果が起きる余地は十分にあるはずだ。

後数分、いや30秒でも気づくのが早かったら……変わらない。

抵抗力は、ニュートンの粘性抵抗で良いのか？ 慣性抵抗も考慮すれば……変わらない。

当日の周辺の水温は何度だった？ 温度が変化すれば、僅かだが、密度や粘度が変化するが……変わらない。

待った。そもそもこれは三次近似でしかない。更に摂動項を増やせば……変わらない。

何故、誤差が伝播しない？ 今までは、苛立たしかった誤差を今では切望している。

丸め誤差を考慮すれば……エウレカ！ バタフライ効果が発生した！ 救えた可能性が存在した！

久しぶりに落ち着いた気分でカレンダーを眺めた。あの時から、かなりの日数が経っていた。だが、私の主観的な時間はあの時から僅かしか変化していない。流石に長時間没頭しすぎて疲れた。少し休もう。

私は、コップの中に水を入れた。コップには半分ほど水が入っている。まだ半分も水がある。そう思いながら、私は眠りについた。

次の朝、目覚めて思った。私は可能性を探していたが、いったい可能性が見つかった所で、何が変わるのだろうか。分かっていた。過去を変えられない事は。ただ、理由が欲しかったのだ。

そう思いながら、昨日の確認を始めた。間違いだった。バタフライ効果起きたのは、計算ミスに過ぎなかった。視界に、昨日その

まま放置したコップが入った。水が半分しか入っていなかった。

変わらない……変わらない……変わらない……… 不変。運動量とエネルギーの保存。ラグランジアンが一定。ハミルトニアンが一定。ネーターの定理。もう諦めた。確かに様々な可能性があった。しかし始まりと終わりは変わらない。退けられたはずのラプラスの悪魔が、未だに存在する。

A l e a j a c t a e s t

賽は投げられた

コルプスを殺した水。水、そのものが憎い。ファウストが望んだように、全ての海洋を埋め尽くしたい。過程が重要？ 第一原因はいわゆる自然現象。土台を揺すっても変わらない。勝手に土台は揺れるというのに。無力だ。

そもそも私は、あの時に選んだのだった。法則にひれ伏すことを。そしてコルプスはそれに服従しないことを。変わらない事を考えるのは非合理だ。もうやめよう。

Lex ? : Motus (運動)

よく、コルプスが言っていた。

「殆どの見方にはバイアスがかかっている。そして、科学者はそのバイアスを取り除き、理性でモノを見なくてはならない」

全ての束縛条件を離れ、プラトンの洞窟から出て、真なる理性の目で何でも見れるはずなのに何も見たくない。意味抜きされた形式しか残っていない。無意味だ。バイアスという殻が懐かしい。

私の部屋には、沢山の本や書類が所狭しと並んでいる。元々、本は沢山持っていた。それに加え、今回の調査のために沢山の資料を取り寄せたのだから、山積みとなるのは当然といえる。元々ある本の中には、『原論』、『プリンキピア』、『プリンキピア・マテマティカ』、『解析力学』、『天体力学』等の数学、物理学関係が多い。コルプスが好きで、私によく教えてくれた。私も、その影響からかそれらが好きになった。逆に、歴史等は時々、その悲惨さが嫌でそこまで好きにはなれなかった。

Sequere Naturam
自然に従え

昔は、その言葉に非常に共感していた。

山積みの本の中から一冊の本を引き出す。不安定な平衡点にあった本の山が崩れだす。まるで地震のように。無作為に本のページを開く。

それは、ユークリッドの『原論』の公準が並んでいる箇所だった。ふいに、第五公準が目に入った。第五公準、平行線が交わらないという公準は、他の公準に比べ、どうも自明ではなかった。それ故、この公準が必要なのかを考えるものが多々あった。そして、この第

五公準が不要になった時、非ユークリッド幾何学が生じた。それは、相対論にも用いられ、重力は四次元時空の歪みとして表された。

ユークリッド幾何学は崩壊した。だが、代わりに作られたのは何か？光速不変の原理。質量を持つ存在は決して光に追いつけない。アキレスと亀のパラドックスが成立する。

次に取ったのは『プリンキピア』だった。物理学の聖典ともいえる書物だ。ニュートン力学は知っていたが、私が教わったのはオイラー等によって数式化されたものだ。この『プリンキピア』は微分積分という代数的方法を用いずに、全て幾何学で書かれている。ニュートン、ライブニッツによって微積分が作られたのにもかかわらず。形式も『原論』を踏襲している。そして、ニュートンの運動の三法則、まさしくこれがコルプスを殺したものだ。

ニュートンは、自分が発見した知識についてこう語った。

「私は、広い浜辺で綺麗な石を見つけて喜んでいる子供に過ぎない。

」
私はこう言おう。

「私は広い浜辺で、とても小さいが大切な石を失くした。それを何日も一人で探して見つからず。誰かに手伝ってもらっても見つからず。シャベルカーで掘削しても見つからなくて、いつの間にか、要らない砂にまみれた老人に過ぎない。」

数多の本。そこには当然のことながら数式が並んでいる。この数式がコルプスを殺したのだ。数式には様々な記号がある。しかし、一番使われているのは””、等号だ。この””””そのものが憎い。私は、なぜ科学を学んできたのだろう？あれほど、好きだった数学と物理学とが今では、一番嫌いだ。

いや、そもそも、全ての知識が嫌になる。全てを疑え。それが科学の真髄ではなかったのか？ そうだ。全てを疑い、吟味した。オッカムの剃刀で切り裂いた。可能性を探し続けた。だが、全てを疑

つても残るものがある。事実と私自身だ。私は存在しないと考えようとすれば、私が存在する。

Cogito ergo sum

我思ふ 故に我あり

そして客観的事実は、かなり妥当性がある。けれども、疑う事もできる。だが、そうしたらコルプスの存在すら消してしまう。それは出来ない事だ。

ニュートンのゆりかごが目に入る。片方の球が並んだ球に当たり、反対側の球を弾く。ただ、それを繰り返す。静寂に近いこの部屋でも球の衝突音はしない。その理由は、昔、コルプスと共に完璧な物を目指したからだ。その特別なゆりかごは、空気抵抗をなくす為、内部を真空にし、その球は非弾性衝突を避けるために、反発係数 e をほとんど1に近づけた。

なので、普通のものと比べて、長時間、運動を繰り返す。コルプスが生きていたときから、減衰せず運動量保存則に支配されていた。それが嫌で、その動作を無理やり止めた。

部屋の中に、プラトンの5つの正多面体、つまり、正4、6、8、12、20面体が飾ってある。コルプスがよく語っていた事を思い出す。正多面体と群と方程式は同じものなのだ。特に、正二十面体と五次方程式の可解群が同じ事を嬉しそうに説明していた。

そういえば、昔、コルプスが私にある問題を出した。その問題はとても難しく、ついに私は諦めて、コルプスに答えを聞いたのだった。答えは”解けない”というものだった。そんな問題を出すコルプスに少し腹が立った。だから後日、落とし穴を掘って、仕返しをした。私は高いポテンシャルから、コルプスを見て、笑った。コルプスも最初は、驚いたが、つられて笑った。

対称性 (symmetria) が、その対称性が苛立たしい。私は、透明な正二十面体、プラトンの”水”を地面に叩き付けた。破片が無秩序に飛び散った。

この調査に伴う資料の中には、被災者の伝記などもあった。何もしたくなかった私は、それらを適当に開いては読んでいた。そのほとんどの、あまり救いが無かった。私が陥ったよりも更に悲惨な状況は多々あった。私の不幸など、比較すれば大したことはない。

”自然” 災害の悲惨さは知っていた。けれども、それは所詮、外延的理解であり、時間と座標と死傷者の数を表にまとめたものを知っているだけだった。今は、内包的に理解した。これが真なる知識の重さなのか。直視しなくても、周りの場を歪ませるほどだ。

中には、私よりも酷い目に遭いながら、前に進んだ者もいた。それには、勇気付けられた。だが、私は停止してしまった。私の運動量はゼロ。動く事ができない。理性では分かっているのに、一歩も動けない。絶望は比較できない。無限でさえも、アレフゼロ、アレフワンと比較できるというのに。

私の心は真性特異点へと落ち込んだ。何よりも速い光すらそこから逃れられない。もがいても引き寄せられて、事象の地平線でバラバラに砕かれ、その残骸は高重力によって、押しつぶされた。

Lex ? : Reactio (反作用)

あの時から、しばらくは数式を一切見たくなかった。しかし、更に時が経過して、また数式を見たくなり始めた。ただ、慣性で、知識を吸収し続ける。気晴らしだろうか。結局は変わらないというのに、事故はいつだって起こる。たまたまコルプスが当たっただけだ。確率はとてつもなく小さい。最大少数の最少不幸、これだけを考えればよい。個体に心を移してはいけない。危険を高めるだけだから。

記録があまりにも苦しくて、私は、上にある展望室にほとんどいた。周りには、天文学関係の本や、装置が乱雑に置かれている。そばには、ガリレオ式、ケプラー式、ニュートン式(反射式)、赤外線など、様々な望遠鏡がある。よく、二人で半球状のドームを開いて、星を見たものだった。

私は、ドームを開き、重力とは逆の方向を眺めた。ニュートンの法則に縛られた哀れな星達が夜空に瞬いている。

美しいではないか。私が、笑おうが、泣こうが、希望を抱こうが、絶望しようが、誰かが助かるうが、死のうが、呪おうが、慈悲を請おうが、その法則だけは常に不変。素晴らしき対称性。永遠の美。美しいと感じる以外にどうする事ができる。せめて、徹底的に利用して、鼻で笑うだけだ。生きるといふ事は、法則に服従する事にほかならない。私は Big Nature (偉大な自然) にひざまずいた。

目に涙が滲む。目に溜まり過ぎた水は、表面張力の限界を越え、夜空と同じ法則で下に落ちた。涙さえ落ちていく。涙に何の価値がある？ 涙はただ、いくらかのタンパク質が混じった水溶液に過ぎない。だが、あの涙、コルプスの涙だけは、価値がある。決して、電気分解できない何かがある。正確に言えば、無価値なのは私の涙だ。

雨が降ってきた。空の涙が私の涙が分からなくなった。雨粒と涙が大河へと流れ込む。全ての水がただ下へと流れてゆく。

一陣の風が吹き、垂直に降下していた雨粒が、横へとなびく。雨粒が、風が吹く前とは異なる地点に落下する。ルクレティウスのクリナーメンを思い出した。ルクレティウスの『事物の本性について (De Rerum Natura)』は記述された最古の科学書とすら言われている。その著書に、クリナーメンという概念が登場する。そして、その具体例がまさに、今起きた現象だ。

足元を見ると、数多のバラバラになった本に紛れて、ラプラスの『天体力学』の破いたページが散乱していた。

ラプラスの『天体力学』。ニュートンの時代から、恒星と惑星と衛星からなる三体問題が解けないといわれていた。三体、更に多体問題を解くためのツールが摂動論だ。それはラプラス等によって考えられた。簡潔に言えば、厳密に解ける主要項に摂動項を加え、解を求めるというものだ。ラプラスはその果てに悪魔を想像したらしい。

そして、コルプスの生は単なる摂動でしかなかった。それが嫌で、『天体力学』をポロボロに引き裂いたのだった。出来る事なら、原字にまで分解したかった。破っても予定調和からは逃れられないのに。

今、またそれを見つめる。もう、無意味な事に気づいたから、破ろうとすら思わない。

新たな意味が生じた。なぜ、私の眼前でカオスが大挙するのに、私の望むカオス、つまりコルプスの生は認められなかったのだ？

その疑問を考え続ける。いつの間にか、夜が明け、日光が入り始める。

プリズムとニュートンの『光学』に光が当たり、その反射光が私の

目に像を結ぶ。二人で『光学』を片手に、光を分光計でスペクトル分解した時の事を思い出した。私は、更に更に分解したくて、装置を改良していた。コルプスは、最初は共にやっていたが、余りにも私が凝りすぎたので途中で飽きていた。

その時、コルプスはつぶやいた。

「科学は、神秘という天使の羽をむしり、虹をスペクトルに分解した。分からない事があってもいいじゃないか？ 私はアクアの行動が全て読めないからこそ面白いと感じる」

それを聞いたとき、私もコルプスの行動が全て予測できたらつまらないと感じた。そう思うと、そこまで知識に固執しなくなった。

ふと、空を見上げると、雨が上がって、虹がかかっていた。何度も、一緒に見たコルプスはただの物質(c o r p u s)になっていた。予測できない”自然”現象によって。

もしも、コルプスの死を避けられるなら、四次元座標系に発生した全ての虹をスペクトル分解しよう。神秘という”悪魔”の羽を一本残らずむしり取ってやろう。虹の美しさなぞ不要だ。キーツは勝手にそれを嘆けたい。

そうだ。観測だ。まず、観測し記録しない事には如何なる理論も打ち立てられない。ティコ・ブラーエの肉眼による膨大な観測データがあつたからこそ、ケプラーは三法則を発見し、更にその法則をニュートンが万有引力で説明したのだ。

肉眼でしか、認識できなかった光も、望遠鏡の発明で遠くまで見えるようになった。更に、光は私達の可視光を超え、赤外線、紫外線まで測定可能となった。目は開いていく。それゆえ、私は観測し、記録しよう。感情を捨て、その目で、できる限り全てを観測するのだ。様々な観測機器を従え、コンピューターという参謀を連れて、ラプラスの悪魔の如く。

自然法則を知り、それを利用するために。データを解析する為に

細かく分ける。それは、アルキメデスの取り尽くし法に始まり、ニュートンとライプニッツの微積分となり、コーシー等による論法で更に厳密になった。還元主義こそが科学の真髄だ。

I p s a s c i e n t i a p o t e s t a s e s t

知は力なり

私自身に法則は見つけられないとしても、後世の者が、記録という巨人の肩に乗って、法則を発見するだろう。未来の者が手にするのはラプラスの目かもしれないが。

知識の為ならば、喜んで捧げよう。オーデインのように片目を。それでも足りないのか？両手、両足、胴体全て捧げよう。ミームのごとく首だけになるうとも構わない。それとも、ウィリアム・ブレイクの『ニュートン』の様に、海底で物質と融合してでも、知識を求め続けようか？

願わくば、法則を打ち破らん事を。

N a t u r a d e l e n d a e s t

自然滅ぶべし

Q u o d E r a t D e m o n s t r a n d u m

証明終了

Appendix (付録)

Appendix A

題名及び章題は、全て、『プリンキピア』と同じラテン語です。D
efinitioは定義、Lexは法則です。他の副題は（）内
の日本語の意味です。

Appendix B

Alca jacta est

カエサルという言葉です。似た言葉に、アインシュタインの、”神はサイコロを振らない”があります。

Appendix C

Sequere Naturam

ストア派のモットーとされる言葉です。ルクレティウスは、ストア派と対立したエピクロス派の人です。

Appendix D

Ipsa scientia potestas est

フランス・ベーコンの言葉です。彼の提唱した帰納法は、科学の基礎的な方法の一つになっています。

Appendix F

For a successful technology, reality must take precedence over public relations, for nature cannot be fooled.

科学技術が成功するためには、体裁よりも現実を優先しなければならぬ。何故なら、”自然”は欺けないからだ。

リチャード・P・ファインマン

FINIS

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7779s/>

Frigidus Symmetria (冷たい対称性)

2011年6月27日15時44分発行